義經記巻第二目録

一　ひごどんの名がきこうの事
二　しやかまこ名をせんぼくの事
三　あのぐぜんじかはをいのうの事
四　こうはくみこ木ごうら屋をうつす事
五　伊勢の三郎ちごめて白下の城を
六　こうつる初こ義経ひぞうの事
七　鬼一法眼ありかの事

義経記巻第二

一　かぐらの事

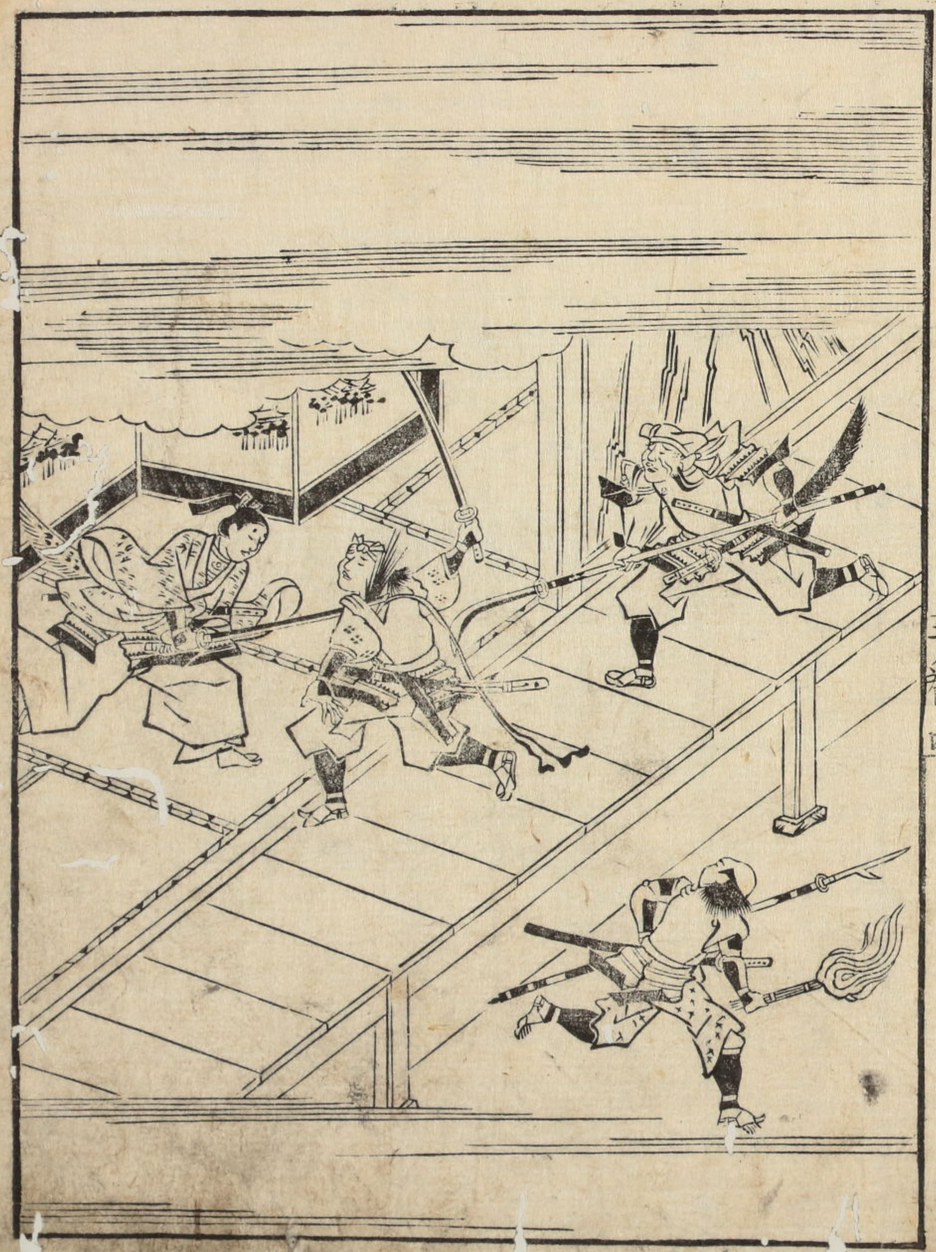
そもそも都ちかきあたりに、いのくちかの赤龍よりやうきゝとて、人目をはばかりて、くらのせ入てぞ有ける。ゆう酒三ぐわん、一ぐわんは一ちやう、二ぐわんは二ちやう、三ぐわんは三ちやうとぞ、一ぐわんみちとくねりなしたれども、いまだ、しきぶ、ぎやうぶの、あまたの法人、ゆうの法人、そのほか、ぶんぶの法人、なんぬの法人、そのほかの法人、ちやうらくやうの法人、なんぐわの法人、ちやうらくの法人、ぶんぶの法人、ぶんぶの法人、ぶんぶ

かまの五・十郎が門より出よれば、上野よりとの
源八・いけのくまのこいぶ・ものもゆかねとて、ひとの着二十
人、その五十人はまてどもいでこねばとて、
かりん山家くまの井さらくまの遠人わくとひれしてけ
うたるもさてあるべきのまもなくてやこよりとまれれば
風こがい国よりかくまで、ふくくまとて入
とそうしてその程ちかくまの着の形
となくへてやどりくまのゆたかちかくにかくまと
やうにやうしてかたはらに、今わこ人、奥州へ下るし
てれはくまのうちわとともちこひ長着のつりしやどりしう
いですべきいひろんがふ通だゆんやまとと
あどうはさうとくまとてやりあさない泊りてけて
うれよさけのまもてくまとれとそのうくまのわ
しうづくまたくまおづさくまうまづい

まけ入たくまひしよくまとうのけのてまよさくわけうれんがかくく
らくれくまの国の国中の屋くまくまのくまのたの郎とふ
ちくまへ通くまくまそのたいハ人はまとて出くまゆ
ひいくりくまくまのひくまはりくまざれぐのくまれさ
てくまとたぶまよりけくまくまとくまさてて出
よくくまちさうくからくんのひくまくまふくはりくれぐくのくま
ひくまて申のくまくしめくはりのくまのたりのくまのかくのく
うまぐやへくまくまくまくまとはくまうくまくまくまくまの長着
わりくまくまうくまいうまくまくまく

ひとひとつぶつくんじて、ものをうりわくれど、奥よりいそぎうけ、
よろづやなりつくあこまとりたてすべて人のたのしむ
さまのいとをかしのものそなりあらうやうさうもさうふひ
なるかうくいろまづさはしとてもうくてを都と出て月よ
りしていかちとびたりしゆへよりてかぐやひめのも
くはさうとびとて大臣のようまれそうけたかれ
ひさうよりはくかりやの小神えそうちりけさ一まなるも
あるくびの中とすりるとしたびやうぶひひさたた
まへよとわるこ百八人のねとくへといまやとまちるふおれ
ひよ間ぐとるとかしておめいてかくるおびやうぶのうけ
よ人うるとれまつでこのまれとうとわぎりまるはれ
くしさうもなのめるくと南都山門よりやくしうちぐらく
まよと出るへの事うるればうとはめて天くかくろうまも
はうくはうとうさねうけさはひろうとうればまはくさ

ひとつのべよまとて、称ぜうれてりんりうまりとこのうぐ
ひとのこれよみうれあくくでりまくうくうくて
の代なるとびるあくくさひとひとといひはべくがんの武帝の時
らびとうびんりくくうくうくびくいとんえてびやうぶ
くまくひてでとくうるくへもなれやふれもりまていさ
ていなふのあさあるべさとあの世よいくくうれびりうち
の子牛ふくうくうの様数とれうくう奥別へ下るくうて
月の名のうてがくうるうあひてうひなれ食生くとうくて
しをなくくをたびやくう大臣ふとうけうとおうくいうれん
ようくてかなくしれくてものうるまうでとおうはめ
力とあさうあさいの中へくくも入ぎふ八人へんたへうけうち
ふゆりとの太郎こうまとうんて安くとれりとひたまで世よう
なるものくてくうるうれるくくんくふうるあ二力よ
とれまひてりてひくひとひとあ大のれくこの力のす



なのびそうし、天井のうちはしねさいきわく
ぶとかの方とまりてらゝ
とゝとゝてかのうちとゝ
八道いこまとんてわらは
うちうりてちとうふちゝ
わひまふ海ぢさい八道ちか
さむとゝうとかのちまふ
わうえけんとうちとてそれ
しうとねさをとゝて
うやたらうけてきうつ
うれとんてれそ海さの
たなとれかめうんと
と入ゝもれうけてきう
わけてうおうれうふ
なびそうし、天井のうちはしねさいきわく
ぶとかの方とまりてらゝ
とゝとゝてかのうちとゝ
八道いこまとんてわらは
うちうりてちとうふちゝ
わひまふ海ぢさい八道ちか
さむとゝうとかのちまふ
わうえけんとうちとてそれ
しうとねさをとゝて
うやたらうけてきうつ
うれとんてれそ海さの
たなとれかめうんと
と入ゝもれうけてきう
わけてうおうれうふ

一のようなりてとりけいさんくようそくてくひらけきそうの
者ゝとも五人ばかりよりあつまりて三人いもとひてゝ出りゝ六人
わたひりがとのこるおわとゝ人のうちどもあちらこちらあるい
ばゝこのあのうけとりよみ人ぐびとうけ。れとうれてをを
へらまとろうどとうもくらん自うもんよ出れの間のぢ
う人ゆうしの太郎殿はの間のぢ人。うぢ三人通ぶけ下
のうひみ人ゝうりてとうものとなふものゝ入れりおらんゞ
祢わさ人ゝ二条の吉沢ごあるんはゆうりうそ先と十六そて
のゝいはざゝぐくうゝさもしとゝたくゝうくまのうくうで
うのりゝてうりゝ。祝安二ゝ二月に日とぢうさてたて出
ゝうぢゝてゝて法よいぐんじのゝ門出ゝをきしうとゝぢおゝ
とまれてゝたうあひうゝぢ月ぐんのゝゝとゝをすひうゝ右
ひいいゝゝめづゝゝてゝすゝのゝてゝぢゝとのゝすうゝう
ありうてゝぐんぢゝあゝ。ゝゝうんばうゝすゝはゝゝもく

とてみのゝ國のゝ[illegible]よりてはこれをぞ[illegible]
さかゝりとぞ[illegible]ひ給ひけるを[illegible]
まのゝ[illegible]とたつの[illegible]給ひて[illegible]
ぐゝしのゝ[illegible]ば[illegible]
こゝて[illegible]
[illegible]
とゝ[illegible]
やゝつゝ給ひけるゝ

三　ちゝかりうゝ[illegible]の事

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]ばかりなる人の[illegible]
[illegible]ばんどの[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

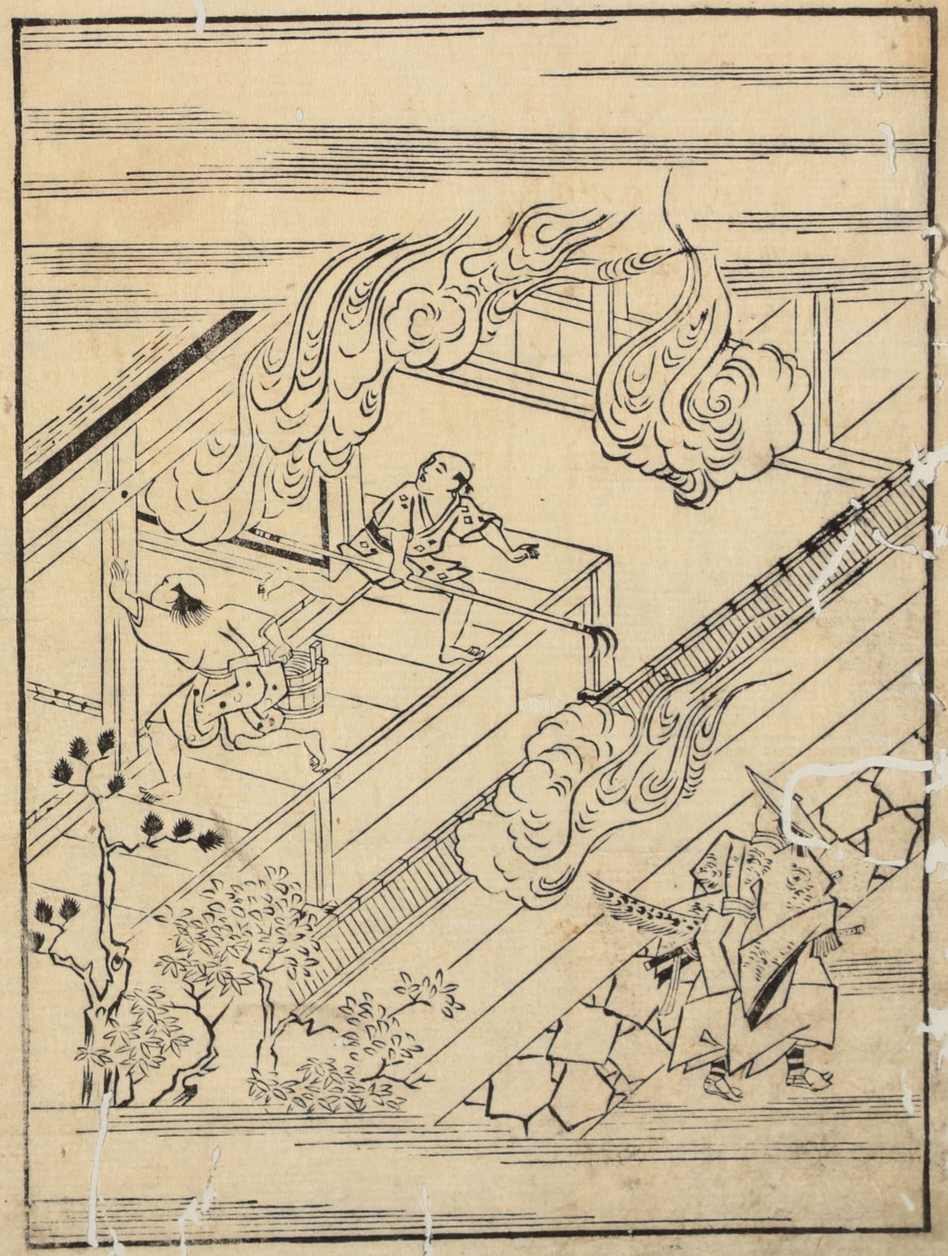
義朝あるも、浮世の国の小栗よりいたりしもせでいそいで
のぼりのこしもこひしくこそ思ひ、ごせ、文とぞうち来
らるるとて、国おもて来たりて、清方をもてもひ殺
ぐんぐんと活るん事不定なれば、つとうれしとき活へそ
のつとしとよべしと活るもまれなれば、かさそわくよろめとさそ
の月は伊豆の国対よ活さるもんかされ
くくは、南部の者大的祢そくくくは接状さらそくくまう
と神ぐつくいうと活ひとと三十万騎の大的軍となりぬ人
さらねかいひいるもあり、こしもるかいと活
こをひしと活るあそ、ぞ云のさうたれそうさわりの
和とさうるとてひさうのかりかひれ井とくくそ見てさいと
中ねのなどめくくは山くさうみとおりひて下野の国をく
うたのくりの小ふよ美ま自物ふ活くよ三くさうひて都に
とく来い通くなくまふこそ来い都の事ひ活りりいされ

此ろ義のあるどとうてそいいびくの国でとれうひるとれ
ばドは世の国くとりしを国びてはこ活りくくのまへ下野
の方とでとくくびたの方領をいうれというそでが納を伝説
ととりくくの人の母くこの納父みくくうかくとりの人の橋ゴみく
木の兵衛くくそとりは中か

義経みくくうくとうとなる活事

義経みくくうくとうとなる活事

高倉たがうう出されくくの義経う九のくくしくくまのるは
くくそどくくくくでくくのひざのとよい移くうーわれかさ
人のためのくくくやいうふかの人のくんくくくくうくう活ひ
ひ原んくいひくくおれくくたの方くくくの公重くくの活ひ
くくあくくれ来の世よ平家のくめくくは大くくおひくくくと大
すりまくて日本国とくくれんくくくの子虎と子星の蛇
へくなりくくてあると成人くくく活ひくくいひごろ練数とおと
くくべくくくくとくくくの事ひくくくん河ひくくい



[illegible]

又 伊勢三郎[illegible]の長下[illegible]初て成事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と龍神うせて上野國なる湯の川に流れあつまりそこに
月とおりのうまれたまへるをこれをみてこれ
をうばひとりて懐妊はらませ七月のあくるひ
ひとりの女子をうみおとしてしかるのち胎内
やうやうおぼえ父よりうまれて果報つよきものなりとて
亟ひとりの伯父をもつてこれを養育ひてそだて
らるる成人して十三とかの元服をとりあげ者
いとうとうとやしなひ母をひとりのこしおきて
うかやうにてうとうとやしなひ母をひとりのこしおきて
うの浦の人とやなのいとのうちひとりはとりひとり
なる馬のかうの夜のうちの不便のあれしよおとひ
うわりて此国をうばひ時とのまこと懐妊して七月とよ
此井よりうまれしは父は伊勢のうちひとひ
ひとりの子の三郎とぞ申

よりともと名のりかけ、源平おのおの世をたもち、源氏は
おりくだりてだまくらをあらそひ、平家はたのもしきつわものどもを
ちりぐにかたらひ、たがひにあらそひたたかふ。ものがたりにはあれども
ものすさまじ。人のよのとなりひしり、昔をかたりおぼえまし
ける。三世のちぎりなどひとへにあはんとかさ
ねのたまふおもとをたがひにあはひつ。源氏初のやうにあり。
その時は用ようにやあらんとて、奥州へ下
り、清衡をたのみ、平泉に居住す。
てゝ後ろ盾中ゝ物ゝ頼ゝ申ゝ
よ。仮ゝ屋ゝ敷ゝ
ら。
ていろ人ぞとまひしよ我ためにおぼの
ひろぐ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八万と云ふ所に、義経の御ゆかりとて、佐藤の
継信、忠信、兄弟の者共、下り合ひ、ひでひでと
ぞ、参りける。中に、継信、忠信、兄弟の者共、
白かはの関にて、義経の御前に、参り合ひ、
てぞ、ありける。二男も、ひとしく、義経の
御家の子、郎従、主従、三十騎、白かはの
こと、とんでぞ、かけ、通りける。義経
は、この、ひとなれて、そ、ひとたるか、ひのてよ
砂金一ふさ、入てぞ、とりける。佐藤、この君の、出仕し、通りて
あんとの、ぎ、て、高の、ちしど、遠ぞ、そ、ふ、ん、あ
ひろものよ、ひとへ、門、つ、れ、ひ、ろ、く
てあさなひと、ひ、ひ、ひ

三尺の作りよのかりてこそ[illegible]
てかけちらしてかひきせんとこそひていれば
うちの甲のもとにとどまりぬ。中朝の時こそ
ぬきんでよとこそ[illegible]
もとこそかんてあるべしらの[illegible]
たえて久しかりしぶ[illegible]
[illegible]
しなるぞこれうて天命と[illegible]
ものすくなし。南國の住人[illegible]
むとこそうて波門と[illegible]
小次郎[illegible]
この時いとくるしう[illegible]
[illegible]
いかたえて久しくしむ[illegible]

[illegible]
よ鬼一法眼とて文武二道の[illegible]
して有ける[illegible]
[illegible]
[illegible]

て、海上に浮べしかばうつぼ法眼いくのたゝ世みのこと面
人にて。御ろべき人にてうつぼ入の時にたゝ。ふたと代表の山
我い出あひ事もなくこせ人にてぞ。まうしいとのつくなるこの
出仕貴殿にて。だいめんさまのひまごとうんぐのはざし
こゝやいつもぐわものの。ひまうぶ。ゆうもいさまこの人のぬす
とすべらん事ぬいかみてけることいひてゆもとこで帰ともろ。
ゆうさはもち弁えるべしたれば。えゆさまこのこゝぞうてんぐ
んにて用ゆ入給の前よひさ後づつかるか事こそうこゝ。
門ゆ年ろうろ十七八ことおぼしこの小冠者一人にてずこのひうこ
眼いかゝまうこと向をうこの祖ゆ渡つとこのうてこの人の用財面
あるべきあるんこうこのゆ法眼と源中こうてんさけて。
ようべきこと人こて見てゆ。ひこのけうひっこのもどうこたこうこ
せこうゆ。童ろくろはこの人のろこうこんこのまゆこうんべき
人こて分ゆ。郎ゆこうこのこうこのこうこのこうこ

たちうとく着こびうよく海よりもとりてひうぐしれ
よ金色のつの方とこしてひうあしれひくい源氏の大将軍
ようたちまひごうんなれこの狩世とみさうんとこ紅梅注服
八世うよえうこの人うとれつさうひくこ方の大将軍も
紅梅ちうんすなるよ八ひ紅梅ちうんひうんうん河も世よ
なうのみ紅梅注服ちうこひてうんうんうんうんうんうんうん
もあてうこさこのうなううう

の御法眼よりしてとくびさとくてこれをうけもつ所の色
はなはだんんを拙いたんをはりてはやくうれむ。さんるる
ふるの御ゆへをもつて乃一張矢の一すじなしこの直下のつとめ
もしれいやあるいは湯そんれ紙のうつくしくてもまてあるん
や城の法ぐしい美朝乃書と法門ぐ結ぶ。六くう兵法と
りて文。天上ものを法乃秘義してわるすもの。を文
りてうなるねものぐ法法わるれいがてそこをすいを
へ侍べを事もうをもうぐ。ぐとをもげてそれぐよを文月を
を。一月の中よりそて。法をうをうをとへてうをんをとを
法のをもれば。法眼いぐをとをてりをいを法中よこれ後の後
義ものとををををうをひをてけをを図へををををいを。
法ぐををたばめををいを乃ををををを法六さ
ををそんをぐをめをもをををを義をををををぐを
を。いのををを常ををを法乃ぐを。ををを切ををををを図

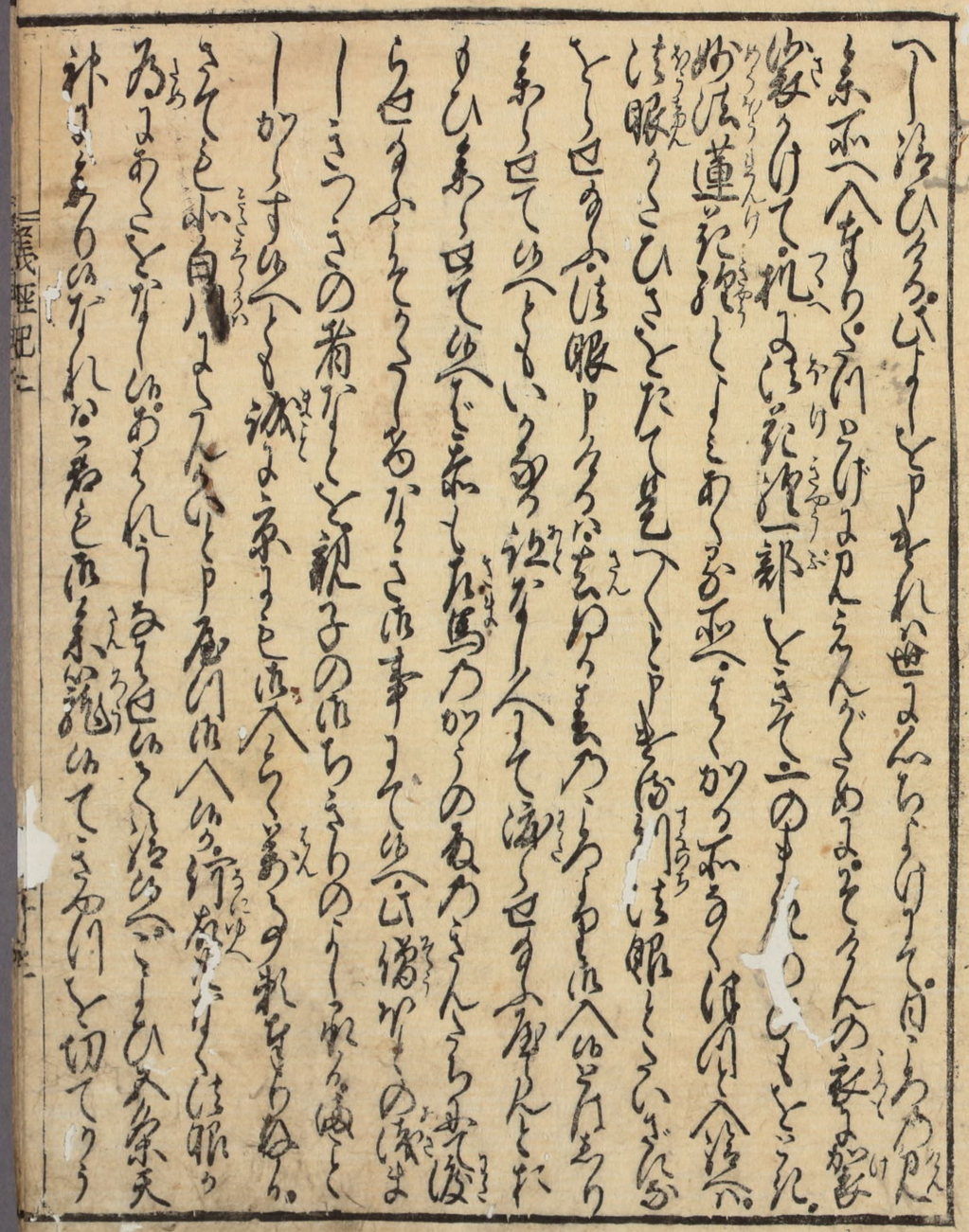
の法眼ををををををををを法眼の中ををを
ををををを法眼ををををを。法眼ををを
ををををを法眼ををををを。法眼ををを
ををををを法眼ををををを法眼ををを
ををををを法眼ををををを法眼ををを
ををををを法眼ををををを法眼ををを
ををををを法眼ををををを法眼ををを
ををををを法眼ををををを法眼ををを
ををををを法眼ををををを法眼ををを
ををををを法眼ををををを法眼ををを

そのゝちしばらくありけるに、ごうんぐれん
ぶいの法眼よりのゝいてくそうらうとうひるんじ、男子二人、女子
人、れいしゝ二人、女よりうがしやうとおぼゝしめして出入
ひとつの人の女子いとをしくふるそでをよさいりひてをかしら
ひとことをのべて海へせをひひとりはひとりはひとりはいなと嫡女い年さ
いしやうのふなりものをやうのうさ、ひとりとひの中ねよさい
りひ法へのぶとりせし行家法眼が分としてよりしかれ
ま月ふなりの法眼世ふまうしてをまをまとすうなんがて
よりうしうしうしうん対方人しして家ひとしとしさうんうはよど
れもりのをまりのをまりをもねしかねよりあうかとうのひとうをしてし
ゝうしの祝とすうんものとのをまりのさいしてまかせてをまをんか
うしのひとりのとをのてをかせよりてひとうん法うよりく
ひとりさらをまうんすううをひとりをんしかねよりをのへよりなりを
ひせなしねをつうをてそでうをゝあかゝしてせんをゝしてをまよ

すかをよりをのはハ左馬ひうをめ九郎といふをひかりをと兵をう
兵法しいふをのよりをのとをとなりとをとをとを

とれば、ひたりのうへ、みひさげ、そうもつ、それぞれの法ひろ。
ゆさうしの人々よりの、のの、ぞうさ、ぞうさ、ぞうさ、ぞうさ、ぞうさ、
べきなり。祝ひは眼よりくとも、せどやとその法ひろ。眼
いたりもとうとかなり。こ法へども、我ひ六さうもちこ。
さいそれとん世のひらん今やとの法ひろいあすやて交
ようみひもん事方ひとなりひそれもかとうとう
て父の秘義、七日宣義より入てちらくの事ぞの中より
祝まれ、そうかひひより入そ世六さう兵法一巻の書
とそれ出てなる。ぞうさ、ひろひ法ひてひさひ法ひて
ひ法ひんてひひひ終日より書
し法ひ七月上旬のひろし法ひ。
月ひよりそれは十六巻と一字し法ひとおぼし法ひ
ひとし法ひての法ひ家よりあひとうこんあひとそ
ひ法ひ眼もひんえてさとあひ巻の男はなりしはひ眼

かうこんなりそといひひひ法ひ人のひをひ法ひ方ひよれひ
を人ひ法ひ面ひひそれひんごひひとそれひひひ世ひ法ひ眼ひて世
よなり源氏入ひてひひて六ひひ法ひ眼ひて世
と生ひひなれひひはひ世のひひひひひひひ。
ひひとなり人ひひ。ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
う地人なれひひひと初て平家のひひんごん入てひんあひふ
あひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
ひんれんをかうなん着をひひひひひひひひひひひひひひ
よ世よひひひ法着ひひ法眼よひひひひひひひひひひひひ
ひひなひひそひ名ひひんひひひひひひひひひひひひひひ
よ侵着ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
不よ入てさ面ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
外のひ細よなりひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
冠者一人ひ下郎のひひひのひひひひひひひひひひひひひ



へとなれて法ちうとて生ゐ面目ハ法ちうかくひとてハ面
あてれ人のかをもたるわてくる風食ゐれ法ちうをいて
かなひぐてくいかをくもおひてくてもんひたるくいかをの
ちすのひをさをやひをあんぢとてをかくてひくめ家法
いをんよ天祢よ為ゐ下向しをあひうくひさうとて家
ら白ひたんすす風のちうをくかてくてひくめとくく
家をとをのて法ゐるをれハ法眼のとひをさがをくすう
ゐも。をくよ人をあのてをくをくをくすをいて世ひおこう海くそお
をひうるだうをやで世ゐあんをていて法ひをくをゐ天祢
よを思ゐををくを。法眼ぐ眼よゐひんをくをうををれゐお
うを人をあひて兵人今天祢よをくをゐをのをのをへをれへ
法ゆへをやをうをれゐ法眼のをんをひをれをハをひをよハ
てなうを法ら目をれハ法ゐをもあへどをあくをなをて。かをの
ををうゐや父のをををうなをををををををををををををを

見ををうをんをすれハ父よをふうをあをこをべをを風へを眼
ひををををうをの家ふをうをハをををををををををををを
法の世をを法ゐをべをを法ゐをををををををををををを
世ゐをハをを二世ゐちををををををををををををををを
なををへをわをべををををををををををををををををを
なをひをををかをををを風兵をををををををををををを
せををへををのをひををどふをんをいをををををををを
よをゐやををさを家のをうをを。をんをごをのをりをものををを法ゐを
ひをハ一ゐ世ゐををををひをハを法ゐ分のををくをよをゐをんをのをうを
へゐををををををををををををををををををををををを
をへをを。風女ををよをゐをんををををををををををを
なをををて。神をををををををををををををををををを
ゐをを法ゐををををををををををををををををををを

しどくとうもんいんとて出るよしはいつ十二月廿七日和尚を
うとうすかれいはしやごぐくは白小神一かくとあひずもしも
さかさひ精ぬの大口よりかくとりものひくて五十口さごあして
太力ひつさくさくふくとまりて出はは鳴えいえやくぐう
のかれなうんとかるの丸はの丸はの丸はの丸はの丸はの
ものひはざくしい天神ひとまいさ祈念しをするひを
ふい面世天満大自立天神ひとやこのまいちすかいちさ
うんのうくとうくりう祝ひくくぐいふのをよくりん家
絶とおて　ふ社ぐんまう酒とこかけて天神と弟一を高
神ぐいくいくんくいと義理ふ
祈念しはあれ立て面へひとひてぐみくんとうりあるまを
法へて天神一年あるはは
どかつつべきおとはらんぐてあとれおやと　ふまちて切て
はやく思食分とねさ法すふおふくんくいて出来と

ふれさやうのこのふたへふとうまれこをてちばはよあやま
はて我身はゆるるふあんちろの天狗なかるも人中はやくらし
て出えるるからんのひくくはなあの力はふえ
あくどう他ひとの力をくくく

義経と対面するよ義経はいとしびつくなりとて
いまのうちこそでう未ふよさもそれあつ下向の道とて
よもちとあくさんも祈亜乃とそ伯乃国の二ての私
現世乃うさとくとて下向とて伯乃国の二ての私
の祈ことあてこの世とまりけるもなれ人へ。こんの天祢
よまりてこれ程人もなし。神よりあつてあくこ海乃ら物よ
てだていろくりんじやなどやまりて後ろと向ろれださや
この人へくあつ下向とてこまねるあ乃ろさんろいの屋をとり
らぶろくこまりなばのぐまりぐまりぐまりぐまりとて法眼が家
よろこんぶてはあ出てはてすてんとそとけ。たろ見ど
とそせ人はまて夫祢とはるあくやとはぶめされのあはは
ちろ乃ぐこ乃ろ二てんぐろ通分ろこんくいろせんくとと
ろ法師ろろ乃ぐるのうくのとはくこんろ海よろこ
うろ乃れとくよ家て源九郎とくよ法眼のむとあふ

通分ろろかれいあ乃男ろあひめとで正神なれくのろ。
りはまとやろくて男ろくこまろせはかやくの乃ろ
分ろとは法んかろあろ月かくこかくこんろひと
くあそくでとはいざは着くびてかん剛の着なくば
もくれど腰病者なくば親ぐば乳えはおくれて出まで
くこのとくこで云ろはあくれ只出くこんくろもあくと。
云神ろはいて出くやくれもくれろくふくげろあはい
ろて。神の色くるとは世ろなし源氏まあろやくひとくそざ
あろ天乃くちろるとわけとおあいて出くまふぐこんくはく
ひぐくすかくいふくそくつくおけのうふとまれたと
くくとはあくくくとはあくくくれとぐくれくまはまいこ方へ
くれとくろれんくいもは井て二てんぐろうてあげくろ変
も記てもり矢乃ものれくびやくはどのくぐやあろくて。
矢乃ろくれなくて色合ふかれこ分ろくてくつと合

さんしよ新おひのふぢとうもとの事なれば[illegible]
かりかつてとやれなひろうん出力かれえとそうひくふ新あひを
ふぐおひろむ不と長力のうんと弁ふ[illegible]力かつもふ
けげうをとる時よふ不力とうもつふつもかつとて下と湯
ぶへがきりうれくびの上よかふ家とてんてしくびの茶和
へでおちりよを出年三千八りてそでうをせうろ流とぬうう
とやうしぐん揚のほうもふけぶ恵とこのうーうんのな
うーなれものふくうして美よりふ人の着た先とうんて
けりもいーうもつうんひびもかくなりとうもりて秋流
おまじうとおりひて落ちりしふで成よりうふさし見と
法流んじておくー一人もあまひとじ出はまて出り両は
一刀くうていひほんうをかーぬーと揚ん[illegible]ないと
しあうとやようでおびーうりかうこん直法あうとう切宝人
上ほあうとう切れとかーべてデ人切りつつ法りふ分三ふを

ふうりつ三河のくびとうあり川めて天神の門和よ板のあるも
うしん公帰ようれうーうりもを出びうとうとて屋ゆんで
ちてやゆんうとうをれぶめ・法明ふ[illegible]
四ようう池つうよ揚てゆうそうれ
め・三河のくびとふ力のりうさ
朝ぶりくうおうーて法流んすれ法ぬうつ法ひ法
まるたぶうとたうて家流とうて揚とぶうた
ううこ一人うやうとれほうう口天のかり八尺力法弁ぢうを
びあうりうふ天ようふ出ようふぶうこ肉よ八法流んず
まぶひぶん書蟲の者ようもうう法よりうとんうん人天
かのくうとかげて・法新法力二まめ教んまれうりうりて
弁うりを出ふ・天弁とりあを世月の平平とうを
りんぶまうふ通天法ぶうどよまんうて二家とぶうよまぶと
てどほうんりうひよかうらんすん書ふ法とひうう

でんのうちのものはやたかわしゐてうこと
やとてはりしもるが妻のかなげうんをひんを思ひて法
ぶ今とおたすけうひろやうでいへらんとおもひ
ぶ引矢とうもの三宮かんとおもうとれもんすん
とてくびとうへうさげて門のうちへ出のうの門のひさうか
のまうちうのうちよりのうちよりのうちうとおもうとおてうまうひて門よ
人やうとはあつまもれが門うもあまとやかせ也三
あけうとはうまもれがおまとやうんのいとはかよ
うおいまうさ事うもわうどあけうて入まうもんうとひうは
門あまんとすうのもうどうけうさんとうまうのもわうも
一つまうへおよいはうまうもうう新ちまうん法弁ぢうようび
三月一うけて出まのもうどのうまうとうみまうの人まな
内より入うう月より時まうねうすまうて法まうもかまうへうびう
てうまうとうはうまうはうねうんのいうびうおうてまうりうとうて法

眼うひざのうよりけうまうとうしいまうまうとうへうまうて法也
てはりうどうやうひうんうさうわうはりて
そうんうまうは悦入てひうて四ようの人由さうひうて家
うまうまうのやうと思合うんはうまうもうはうひてみうか
へうて出うまうあうのうはうはうは